



ウズラって  
 いまにも飛びそうなほど大きいの  
 あんなに太っていて大丈夫かな。

「ヒヨドリさん」って  
 声をかけたのに  
 実をバクツと食べていってしまった。

コルリって  
 とてもかわいそうなのです。  
 他の鳥に託卵されるんですって。

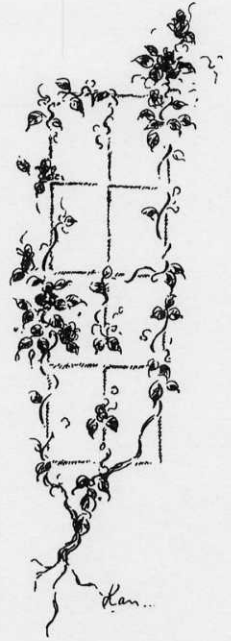
山々に囲まれたこの東海の  
 生徒の心の中に  
 野鳥を育む心が広がっていく。

昭和55年2月1日  
 編集・発行  
 岡崎市教育委員会



(野鳥の観察—東海中)

## 一 教育随想 一

一球を大切に  
する気持

プロテニス選手の神和住純さんが、恩師の故松本武雄氏のことを新聞に次のように書いていた。

「先生は決して選手が試合中に負けても叱ることはなく、むしろ練習中や勝利の後の方がこわかった。『この一球が口癖で、『この一球は後にも先にもない。一球々々を大切に打て』といつもいわれてきた。信念のテニスだった。』

テニスについて精しくはないが、一球一球を大切に打てということは、そのことによつて、どのような球でも処理する方法を自然とカラダで覚えることができるからであろう。

新聞記者の場合でも同じである。どんな小さな事件でもゆるがせにできない。手を抜くと、往々にして大きな落とし穴にはまりこんでしまう。

新聞記者の中にはよく「オレはつまらない事件はやらない。大きな派手な事件

## 牧内節雄

だけを取材するんだ」という者がいる。しかし、こんな記者に限って、大きな事件を取材しても、たいした成果をあげるということができず、他の新聞に抜かれ放しということになり勝ちである。

たとえ小さな事件でも、それなりの背景を持っており、それをゆるがせにせず取材することによつて、自然と事件処理の仕方を知ることができ、体で覚えていく。

事件というものは、千差万別であり、しかも、「生きもの」である。どのように発展していくかわからない。それに対処していくには、日ごろからの積み重ねがモノをいう。

ひとつひとつの事件取材を大切にすることは、一球々々を大切にすることをテニス選手と変るところがない。

しかも、昨今の世の中の出来事は、これまで経験、先例が役立たなくなつてきている。だからこそ、「一球を大切に

する。」気持が要請されてくる。後にも先にもない。「一球」を打ちまくる姿は、現場で小さきまざまの問題と真面目に取り組み、悩み、苦しむ職業人と全く同じだと思ふ。その悩み、苦しみが真剣であればあるほど、解決の道はおのずから開けてくる。新聞記者なら、よい記事が書け、時には特ダネが生まれてくる。

さらに、神和住さんの文章の中で意味深いのは、「信念のテニスだった」という指摘である。太公望の兵書には「ゆるぎなきものを人びとに与えた者こそ天下に経略しうる人である」とあるそうだ。上がぐらぐらぐらふらふらいては、部下は言うこともきかないし、ついてもこないだろう。

私は社会部長時代、「オレの右に出る新聞づくりの名人はいない」と言った。新聞社という職場を、「戦いの場」と思っている私は、一瞬のスキが、部長の不適切な指示が、報道合戦でひけをとることを身をもって知っており、何よりも大切なことは、部下に戦いに勝つ自信を持たせることであつた。だから、私はすべてに自信を持って、判断し、決断した。いま振り返りかえてみると、結果にそれが好成績をもたらしたと自負している。

教える者の信念の重要さはいまさら言う必要はあるまい。しかし、それは、日ごろからの「一球」を大切にしている気持からはぐくまれてくることを知るべきだ。

(毎日新聞出版局長)

## ほほえみのこと

加藤伸子

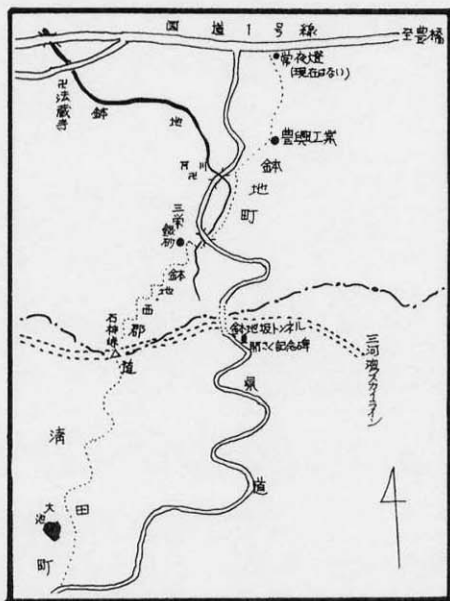


パリの街を地図とにらめっこしながら歩いていると、やさしいほほえみによく出会う。例えば、

信号で待っている時、となりのブルーの瞳がやさしくゆれて、笑いかけてきたりする。メトロの入口にある路線図の前でたずんでいると、犬をつれた上品そうな銀髪の婦人が、私をのぞきこんで美しくほほえむ。彼女は英語で私を助けてくれた。

日本では、こんなふうに見も知らぬ、しかも外国人にわけもなくほほえむことがあるだろうか。変な人と思われるか、へたをすればフンと鼻先であしらわれるのがおちである。そういうえば、信号でバタバタと走っているのが自分一人であるのに気付いてハッとすることがあつた。

信号ではゆっくり待ち、街で目の合った人々に、にこやかにほほえみかけられるような毎日にならなうと思いつつ帰ってきたはずであつた。ローマの美術館で、写真をとっていた私のじやまにならぬ様



— ふるさとの山河 —

# 鉢地坂

たのである。このようにこの道は、本宿、西郡を結ぶ軍事・経済道路であり、また、信仰の道でもあった。

明治に入って、この道は、県道切山蒲郡停車場線と呼ばれた。明治三十六年、蒲郡の尾崎市右衛門が蒲郡の経済圏拡大の見地からこの道の拡幅と鉢地坂開きを提唱、以来長年にわたる両町村の願望がやっと叶い、県の認可もおりた。早速両町村で鉢地坂開き期成同盟が昭和四年結成され、翌五年蒲郡側、六年本宿側から工事が始められた。当時県下ではじめての隧道工事でもあり、約四年余りの年月を費し、昭和八年十一月やっと完成を見るに至ったのである。

開き後、名鉄が本宿―蒲郡間を結ぶ路線バスを開通させた。当時としては、最新型フォード低床式流線型バスで大へん人気を呼んだそうである。また、眺望が箱根に似ているところからこのあたりを新箱根と呼び名所の一つとなった。

(羽根小 細井義雄)

待ってくれた少年に、笑ってどうぞと合図した時の、あの少年の黒曜石のような瞳のやさしさが今でも忘れられない。

(男川小)

## 香港の町かどで

蜂須賀 久

「香港は治安のよくない所でスリが横行しているので、懐中物にはとくに注意してください。なお、裏通りなどに勝手に入らないようにしてください。盗られ損殺され損です。」

空港からのバスガイドが最初に言った言葉である。

高層ビルの林立する香港市街には車が溢れ、われわれのバスは交差点で一瞬立ち往生、見れば信号が赤でも割り込んでくる。でも運転手は慣れたもので、何とかそれをよけて交差点を抜けた。

「交通規則もあまり守られていません。とくに車優先で、歩行者は轢かれ損です。から注意してください。」

とんでもないところへ来たものだと思うと同時に、道義、地におちたとは言え、まだ日本の方がかなりましであることを痛感した。

世界で最も地価の高い所とのことで、船を浮かべての水上生活者が多い。たまたまバスの窓から小学校が目に入った。運動場がない。これも土地がなく、近くの公園を利用しているとのことである。

(三島小)



四季おりおりの変化を見せる、ここ鉢地坂も、現在は、産業・観光道路として名高い。また、ハイキングコースとして訪れる人も多いが、往古は鹿・猪・兎などの通るけもの道であり、傾斜のきついなかなかの難所でもあった。

近世に入り、三河中部を結ぶ鉢地。西郡(蒲郡)道も多くの人々に利用された。この道は東海道を下り、旧本宿村東町の常夜燈から右へ折れる。豊興工場の正門あたりを通って旧鉢地村へ、郷中からは、しばらく鉢地川にそって進む。三栄銀砂工場の下付近で川を渡ると山道へ入る。ここからは急勾配の尾根伝いを曲折しながらなおも上っていく。やと一本松の見える石神峠にたどりつく。道は三河湾スカイラインで寸断されているが、ここからの眺めは三河湾が一望に見下ろせ、すばらしい。ここからは道は下りと

なる。やがて旧清田村の大池の東へ出て旧西郡に至る。

室町期、法蔵寺中興の祖宏山菴芸もこの峠を越え、清田の安楽寺を開山した。

江戸中期の本宿村方明細書上帳にも「鉢地村道 但回国西郡村 松平様御屋敷へ道法 凡式里」とある。文久三年、信濃騒動の後話として西郡藩士二百余名が物具いかしめく威風堂々と法蔵寺へ出陣の折りもこの峠を越えたと記されている。

その他、魚・塩・糸買いに、また、竹島のお開帳、衣文観音詣にと多くの人に利用され

# 岡崎再見

19

## 八丁味噌

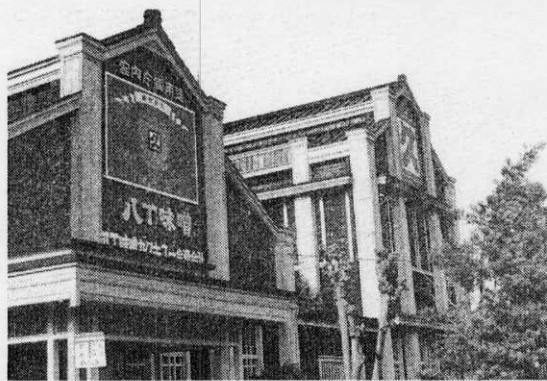
岡崎名物のひとつ八丁味噌をたずねた。

大部分が機械化された中で、熟成倉の仕込みだるは、長い伝統を物語っているようだ。見上げるようなたの上に、約千個の川石が山のように整然と積みあげられてあった。「地震が来てもびくともしませんよ。」と説明があったが、石それぞれの重心をたの中心にむけて、みごとにすわっているという感じだ。仕込みだるが何百とならんでいるようすは壮観そのものだ。二夏以上

をその石にねかされて「コク」のある味噌ができるという。

大豆蛋白がアミノ酸に変わっているので栄養満点。その上塩分も少なく、高血圧の人にも離乳食にも最適とのことだ。

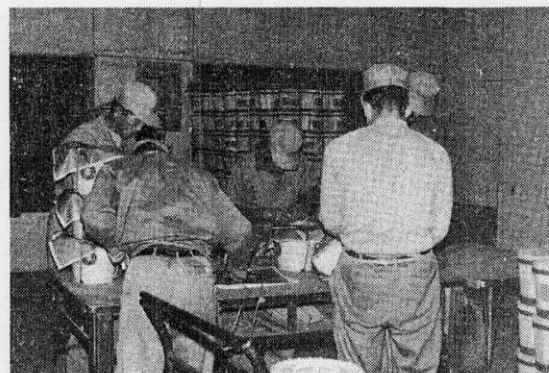
「煮れば極よし 焼いて 又よし  
「焼味噌は飯が進んで。」と言えば「いっばいもまたまし。」 だれかの声  
「でんがくみそがいちばんだよ。」



① 本店正面玄関 享保年間からそのままの姿を今もとどめている。



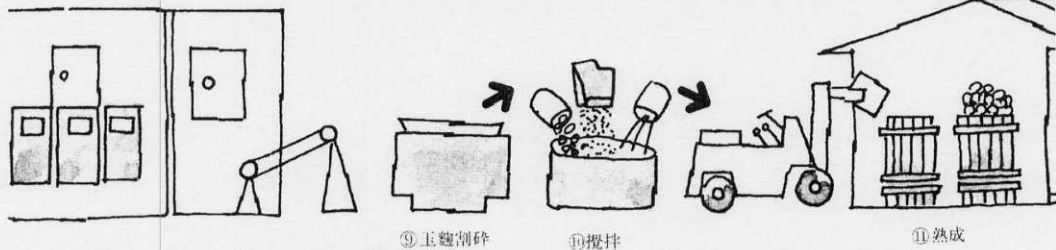
② 仕込み用重石 石でないと樽全体に平均した圧力がかからない

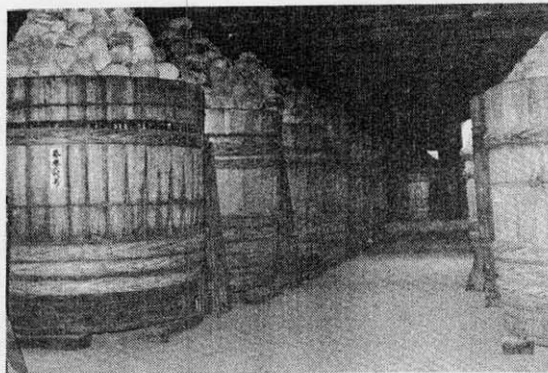


④ 包装 樽・アルミバックなどの容器に詰められる

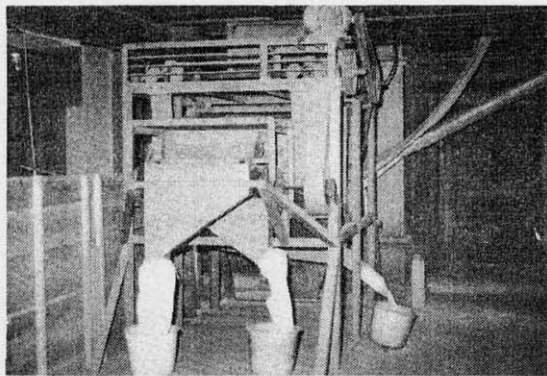


③ 味噌売帳 享和四年 (1804) 大豆買帳 天明六年 (1786) 當座帳 弘化二年 (1845)

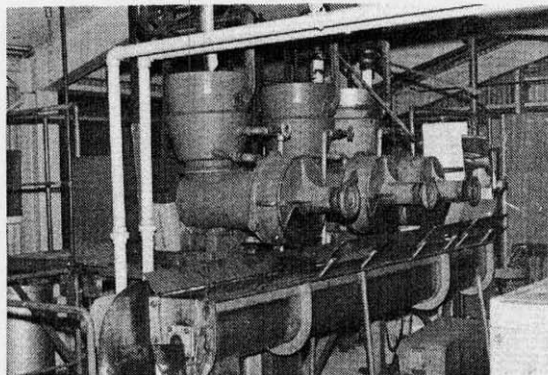




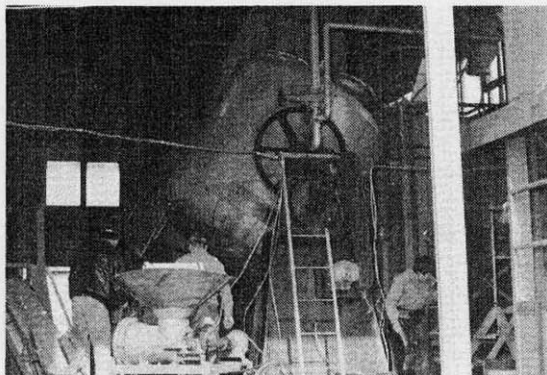
⑧ **ねかせ倉** 味噌の重みの80%の石を乗せる、地震があってもくずれない、2夏以上熟成する



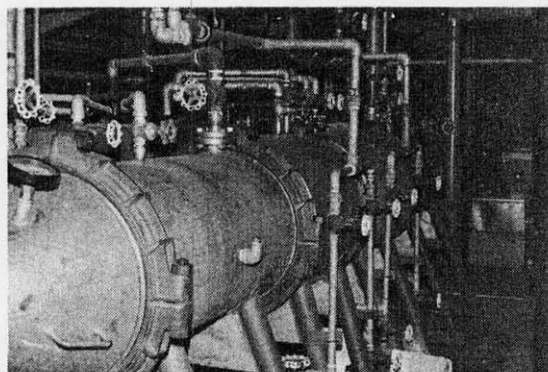
⑤ **選別** 大豆の中からゴミを取る、アメリカ産はトウモロコシも入ってくる



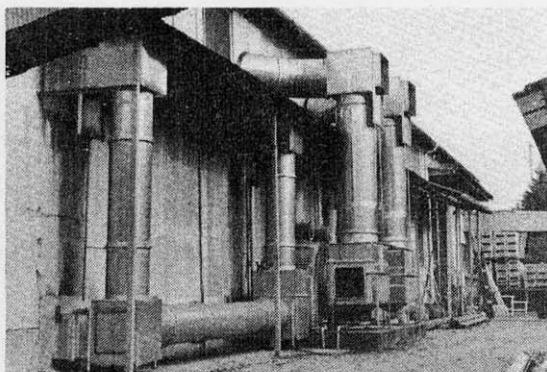
⑨ **味噌摺り機** 米麴みそ・味の素・甘味を加えてねりあげる



⑥ **むす** 大豆の養分を逃がさないために蒸気釜でむす

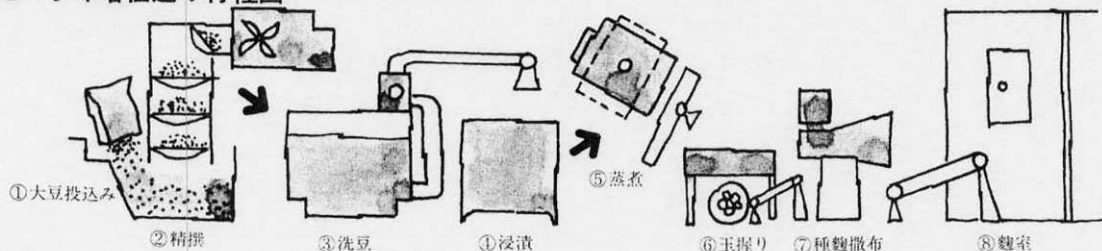


⑩ **昇温機** 80°Cの熱処理を加える



⑦ **種麴つけ** 35°を保つため温風を下から4時間入れる

■八丁味噌仕込み行程図



# 教育日々



## 社会科—この三問

河合中 中根 晃

四十五分の授業も終りに近づき、次に学習する内容の話になると、生徒たちは、

「年度の時間の『この三問』は何にしようか。」

と、課題づくりにとりくむ。

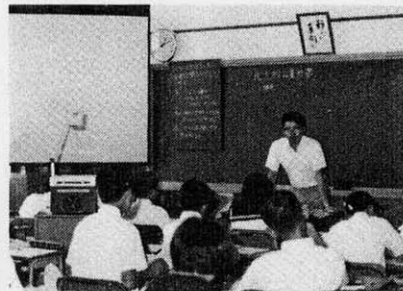
「今度は、日英同盟はどうして結ばれたか、という学習課題だけど、どんな学習をやってきたらいい。」

「どんな内容の同盟を結んだのだろうか。」

「三国干渉にイギリスが加わっていないか」と関係があるのだろうか。」

「どんな影響を与えたのだろうか……。」

このようにして、生徒たちは家庭学習の内容をきちんとノートして家路につき、次の時間の学習にとりくむのである。



本校へ転任して、二年が過ぎようとしている。何とか生徒たちに学ぶ意欲を持たせようと実践してきた。現在、この学習課題を設定して、家庭学習を行わせる方法を進めており、ある程度の成果が得られたと思う。

まず活発な発言が出るようになった。家庭で学習する内容をつかむことができ、予習してゐるから、発表に自信が持てるのであろう。

次に、学習に深まりが出てきた。予習も、教科書以外に、資料集や事典などを使い、かなりくわしく行うようになった。

また、生徒一人一人のノートが充実してきた。ノートの使い方も指導したが、今では、自分なりに工夫して、自分だけのノートをつくりあげている。

そして何よりも、自ら学ぶ習慣がついてきたことが一番大きな成果といえるだろう。

しかし、不安もないわけではない。全校三クラス、すべての社会科を担当しているわけで、その責任は重大である。社会科を好きにするのも嫌にするのも自分の腕にかかっているわけである。一学年一学級というところで授業は常に一回勝負でありやりなおしはきかない。従って授業をふり返った時に、これでもよかったのだろうかと思うこともしばしばある。より充実した教材研究と、自身の力量を高めなければならぬと思う。

### 子供と教材を結ぶもの

連尺小 兵藤 鋭子

「先生、今年のバスケット、楽しいね。」

「どうして。」

「すぐボールに触れるもん。」

日頃、水泳以外の体育の授業には意欲的でないY子が、ふと話しかけて来た。やはり、こういう子がいるんだな……と私の予想は、的中した。

Y子は、ゲーム中にボールの回ってくるのが余程うれしかったのであろう。今までのY子は

ゲームになるとボールについて走り、人とボールの団子になってコートを手を右往左往していたにちがいない。それがボールが回ってくる、パスができる、時にはシュートのチャンスさえ巡って来るのである。パスやシュートの練習がゲームで生き、ゲームのおもしろさを体得し始めたのである。

バスケットのおもしろさは、ゲームの程度にかかわらず、パスの連繋からのシュートの成功にある。ではどうしたら、パスの連繋からシュートを成功させることができるのだろうか。

団子ゲーム?の様相を観察していると、ボールより人に触れる方が多い。

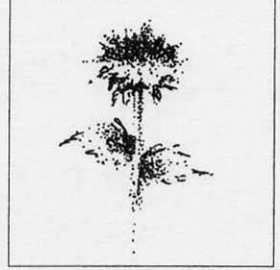
「バスケットは、人の体に触れないことから始まる。」

とI先生がおっしゃったことがある。これだ。この原則を教材の根底においたならば、パスやシュートのチャンスは容易にでき、ゲームとしての形も早く整うにちがいない。その中で個々の技能やチームの力を育てていくことができるのではないか。ここから私のバスケットボールの教材づくりが始まった。

「人の体にさわらない。」この原則のもとに教材を組み立てていった。そしてこの根本ルールは、Y子のようにゲームでパスやシュートのできる子を育てることができたのである。

子供と教材を結ぶものは、何か。バスケットの教材づくりのきっかけを通して、子供の実態と運動の特性を見なおしたとき、それが見つかるような気がした。





# 雨にも負けず健脚を競う

〔寄贈研究物・資料等〕  
 ◆ぼくのこえわたしのねがい  
 昭和54年度都市美化啓もう作文集 岡崎市美化協会  
 ◆ゆとりある岡崎の教育をめざして—79岡崎の教育白書  
 岡崎市小中学校職員組合

## 第31回 市民駅伝

去る一月十三日(日)恒例の岡崎市駅伝が、市マラソンコースで実施された。

中学校の成績は次の通り  
 優勝 岩津中A 48分26秒  
 二位 福岡中A 48分39秒  
 三位 矢作中A 49分26秒  
 四位 城北中A 50分32秒  
 五位 甲山中A 50分34秒  
 六位 東海中A 51分1秒

▽区間賞  
 一区 松本久(甲山A) 11分1秒  
 二区 岡田敦嗣(矢作A) 6分29秒  
 三区 稲石正志(福岡A) 5分32秒  
 四区 柴田英雄(岩津A) 福田尚文(矢作A) 5分29秒  
 五区 平石博和(岩津A) 7分27秒  
 六区 梅村信宏(福岡A) 6分35秒  
 七区 神谷植金(岩津A) 5分41秒

▽優秀賞  
 「表現活動を生かした主体的な読みの授業」  
 連尺小 杉浦博司  
 「楽しさ、喜びを求める授業改造」—「できる」学習指導の研究と実践—  
 矢作中 名倉昭人  
 「ひとりひとりを生かす数学教育」—教育機器を活用した個性

別化・集団化

甲山中 数学部  
 代表筒木幸夫

▽佳作

「自作の偏差値による進学指導のための資料作り」南中榊原豊  
 「反省を生かした主体的な社会科学習の実践」六ツ美中杉浦健支  
 「操作に重点をおいた理科指導」六ツ美南部小江村力  
 「自立的な追求態度や能力を育てる算数科の指導」細川小算数部(代表二瓶千秋) / 「図書館資料の収集と活用」藤川小中年部会(代表山田一恵)

■海外研修報告会

二月九日 働く婦人会館  
 昭和54年度海外研修者は、ヨーロッパ方面25名、東南アジア中国、韓国方面43名、アメリカカナダ方面14名、合計82名。報告会には次の人が発表をした。(敬称略)  
 ▼ヨーロッパ方面  
 加茂健三(竜美丘小) 島田成子(緑丘小) 沢博史(城北中) 加藤伸子(男川小) 落合恵子(大門小)  
 ▼東南アジア方面  
 柴田敏希(東海中) 平野有行(葵中) 岩月健(広幡小)  
 ▼アメリカ方面  
 安藤恒夫(竜海中) 大須賀明

彦(葵中) 後藤彬(大樹寺小)  
 岡田淳子(竜海中) 五十棲伊久子(六ツ美中) 杉浦恵美子(甲山中)

■三学期の研究発表会

▼根石小研修会 1月25日  
 ・主題「読書指導の探究」  
 ・講師 甲斐睦朗・赤座憲久・松山満夫先生  
 ▼岡崎小研究発表会 1月29日  
 ・主題「いつでも、どこでも、だれでも歌声を」  
 ・講師 團伊玖磨氏  
 ■ストックホルム  
 少女合唱団来訪

姉妹都市スウェーデン・ウツデバラ市の紹介で来日したもので

昭和55年度 研究発表校の研究動向

校名	主 題	予 定 日
緑丘小	表現—ことばの力—	5月27日
岩津中	基礎学力・態度の充実	6月10日
美川中	ひとりひとりが自ら学ぶ力が —テレビ・タイム活用を通して—	9月26日
奥殿小	自ら学びとる社会科学学習	10月7日
愛宕小	考える力の開発をめざす学習指導 —特に観察と表現を重視して—	10月17日
福岡小	能力を発開する理科学習のあり方	10月28日
男川小	温かい人間関係の上に立つ わかる学習指導の確立	11月7日
連尺小	学びとる喜びを深める授業の創造	11月21日
竜海中	心身障害児理解推進	11月中旬
広幡小	自ら学ぶ力を育てる学習指導 —学習転移力・独り学びを育てる—	11月28日
矢作西小	ゆとりと充実のある授業の指導法	12月5日



で、一月二十二日勤労会館で本市の児童生徒たちと合同演奏会を開いた。

# まつもと 窯跡



所在地一岡崎市竜泉寺町

竜谷小学校へ登っていく道の右手にこんもりとした竹やぶがある。この中に、むかし陶器を焼いた窯跡がある。昭和四十九年一月に市の史跡に指定され、松本古窯跡と呼んでいる。この遺跡は、当時、竜谷小学校の新校地を造成中に偶然発見されたものである。

発掘された陶器の破片から推測すると、ここは、東海地方で鎌倉時代に発達したうわ葉をつけない無釉陶器の行基焼、あるいは山茶碗と呼ばれる陶器を焼いていたようである。製品の大小の碗は、多孔質で柔らかく、吸水性も多く、焼成温度も高くない方法で焼いていたようである。窯は、丘陵の傾斜面を掘り抜いた地下に築いた穴窯と呼ばれる形式である。焚口、燃焼室、焼成品、煙道の各部分からできている。傾斜のある焼成室に碗をならべるため馬蹄形をした焼台が使われ、この焼台の上に碗を重ねて焼いたと思われる。

現在、窯の形はかるうじて見つけられるほどである。たぐさんの太いもうそう竹が地を埋めて、昼間でも薄暗い。

この窯跡は、幸田町方面の窯跡がほとんど崩壊してしまっただので、学術的に貴重である。

●カット

六北小

三 矢 かな 江

## 日本を

- お茶を飲みながら 遠藤 周作 ￥ 880  
小学館
- やさしきとは何か 谷貝 忍 ￥ 800  
一光社
- 八丈多与里 團伊玖磨 ￥ 1,000  
朝日新聞社
- おばあさんのひきだし 佐橋 慶女 ￥ 920  
文芸春秋
- 日本語と女 寿岳 章子 ￥ 320  
岩波新書
- わたしの自叙伝 (1・2) N H K ￥ 1,000  
日本放送出版協会
- 日本の家庭 望月 一宏 ￥ 750  
中央公論社
- ゆっくりしいや PHP 研究所 ￥ 980
- 心に残る教師のこと 椋 鳩十 ￥ 1,300  
明治図書
- 学校と家庭の間 戸田 唯巳 ￥ 1,300  
明治図書

「おい／三分遅刻だぞ！」  
「すみません！ゆうべ遅くまでやっていて、今朝目が覚めたら七時半だったんで、びっくりして何も食はずにとんできたのですけど……」  
「ダメ！遅刻は遅刻、そこに坐つとれ！」  
入試本番を目前に控え、必死にがんばる生徒の前に、心を鬼にする。

## シオシア

ある子の日記に「先生はやっぱり私たちと違う。私のように下積みが長い者は淋しい。他人から無視はされなくても淋しいんです。えらそうなことをいってごめんなさい。でも、だれにも言えないので、先生にだけ言います。」とあった。  
子どもたちは先生を信じている。  
信頼にこたえるべく努めるべきだ。

柴刈りは今、ろがいちばんだ。子供のところ、学校から帰ると、置き手紙を頼りに父母のいる山へ出かけた。何日もそれが続いて愚痴を零さず手伝いもした。家事に使う一年分の燃料として、どの家庭もこの時期に山に通い続けた。やり方が悪くて叱られましたが、親子の絆はこんなところでも深められたと思つた。

すんだ冷たい空気が開け放った窓から、授業を始める第一声は、いつもきまつて、「窓を開けて。」  
大寒は過ぎてても、寒い日の続くこのころ、子どもたちは放課になってもなかなか窓を開けない。かせて欠席する者もちらほら。健康第一で、一年の締めくくりを。